

名前で楽しむ社会人落語

縁があって社会人落語の活動をする人たちとの交わりが始まってもう四半世紀になる。

人それぞれの持ち味や個性が面白いのは当然のことだが、自分で考えた名前が付いていて、これも面白さのひとつになる。プロの落語家のように三遊亭・柳家などの由緒ある系列が持つ名前というのはなく、それぞれが個人として活動しているので「個人の独特の名前」が多いのが特徴だが、中には大学の落研に由緒ある亭号が存在して受け継がれているものもかなりある。

その多くが「職業」をもじったものや、駄洒落的なもの、自分をPRするもの等で大変面白い。

これまでに出会った活動家たちの名前とその味わいを順不同で、思いつくままに紹介してみたい。

<1> 大泥棒の素性はいかに？

最初に出会った「河内家るばん」の名は、すんなり耳に入ってきたものの「河内の大泥棒とは何じゃいな？」と気になった。実は落研の時代に、先輩「寝住家次郎吉（ねずみやじろきち）」から「日本の泥棒に対抗してお前はルパンにせえ！」と一言。

るばんと出会って社会人落語の会を開いてみようということになって、かれこれ 20 年を越える時が流れた。豊洲で都笑亭を始めた頃に行動を共にしたメンバーや交流があった方々の中から、拾い出してみると……。

<2> あの体型はたるみが原因

上方から来た「竜宮亭無眠（りゅうぐうていむうみん）」は、ムーミンを思わせる風貌だがめりはりの効いた笑い転げるような高座。

「三龍亭多留満（さんりゅうていだるま）」は体型から見てダルマそのものでわかりやすかったが、漢字で書いた名前を見て「さんりゅうていたるみ」と読んだお客さんがいた。体型から見て「たるみ」と読んだのかもしれないが真偽の程はわからない。この男、落語好きが高じて平成 14 年に 38 才でプロ入りし、昨年真打ちに昇進した。プロとしての名前は橘ノ圓滿、「昔のイメージが残るような名前をいただけて良かった」と喜ぶお客さんもいるらしい。

<3> 無学でも生きていける

同じ会社に勤める「無学亭喜楽」は無学で気楽という江戸っ子の気っ風を感じさせる名前だった。

「南亭骨太（なんていこった）」のユーモラスな名前に笑っていたら、小学校の教師をしているという男が「南亭八つ頭（なんていやつがしら）」という名をぶら下げてきた。学校の先生が落語をやるなんて「何て奴かしら？」という乗りなのだろうか。

<4> 職業が名前になった

職業をもじって名前にする人はかなり多い。これだけは大泥棒にはできないこと。

製薬会社の営業マンをやっているという男は「久寿里菊之助」という名だった。「薬効之助」では生々し過ぎるということなのだろうか。寿司屋さんで「にぎり家弥助」、塗装業を営む「ぬりた亭津久蔵」、火災保険を扱う損保代理店を営む男は「火災亭珍歌」と職業を見事に表現した名前は覚えられやすい。

大阪の居酒屋の女将「五月家ちろり（さつきやちろり）」は、自らの職場の小道具「ちろり」を名前に折り込んだきれいな名前だが、「ちろり」を知らない人の方が多くて少々残念。いくつもの競技会で優勝経験を持つ。

自分がやる飲み屋の名前を亭号とした「隠れ家虎太郎（かくれがこたろう）」は熱狂的な阪神ファン。

<5> 先生が落語を？

前述の南亭八つ頭は小学校の先生、都笑亭の地元である豊洲の学校に在職中だったので、観客席には教え子やその家族が来ていた。下ネタや艶笑落語などやれないだろうかと心配していたが……。

兵庫県の高校の教師が「春歌亭丹馬（しゅんかていたんば）」という違和感が面白い。

福岡で活躍する「粗忽家酔書（そこつやよいしょ）」も高校の教師、落語の他に本職はだしの紙切りもやる強者。その仲間の一人「川崎亭好朝（かわさきていこうちょう）」は中学校の校長先生で亭号は町の名前。

<6> 警察もいれば医者も弁護士も・・・

もう定年退職したようだが、「新潟県警の警察官だった「三流亭楽々（さんりゅうていららく）」は交番のお巡りさんの仕事を通じて見た風景を自作新作落語として披露して名を馳せた。「三流で楽ちん」などと遠慮がちな名前ではあるが、通の良い声で滑舌良く語る高座は素晴らしい。

三重県で医者をやっている「南遊亭栄歌（なんゆうていえいか）」は、ミナミで遊んで栄えるという一見上方の遊び人を思わせる名前ながら「何言うてええかわからん」を裏に隠す粋な名前。

「芸乃虎や志（げいのこやし）」は愛媛県で病院を営む。仕事が「芸の肥やし」になっているのかなと感じられる歯切れの良い面白さがある。

ある席で知り合って名刺交換をした人は、室蘭で弁護士をしていると言う。高座に上がると「山椒亭小粒」と名が変わる。まだ高座を拝見する機会がないが、おそらくその名の通り名のだろうと想像している。

木村家べんご志という「そのまま」の人もいる。

<7> 粋な名前も悪くない

「若葉亭志ん女（わかばていしんめ）」は若葉の芽吹く季節になると毎年「いい名前だなあ」と感心する。若葉と新芽の季節は、新しい命が生まれて大きくなるための第一歩を記す日本の季節の中では一番美しい季節のように思う。味のある高座はともかくとして、この人のマジックは軽妙な語り口も加わり、中々のもの。

「秋風が吹き、商売は低調」とやや自嘲・謙遜気味の「秋風亭てい朝（しゅうふうていていちょう）」。

「遊んで喜び、芳しく生きる」とは何とも凝った、しかも美しい文字を連ねた「遊喜家芳生（ゆうきやほうしょう）」の高座は文字通りの「芳しい生き物」。

スキンヘッドのおじさんが突然登場して、初対面なのに「めずらし家芝楽（めずらしやしばらく）」とは。

キャッチフレーズが「歩く百ワット電球」だったが、省エネでLED電球に置き換わってしまって困惑。

働いて、失敗して、恥をかいて・・・、サラリーマンの暮らしそのままの「羽太楽家はじ鶴（はたらくやはじかく）」は肺がん闘病を経て見事に社会復帰。サラリーマンとしての仕事以外に社会人落語活動というもうひとつの世界を持ち、これが復活の原動力だったのかも。

信濃川の河口に広がる水の都新潟から来た「水都家艶笑（みなとやえんしょう）」は名前の美しさもピカイチ。

日立製作所の社内のクラブから始まった「日立寄席」を取り仕切る「社繁亭倍蔵（しゃはんていばいぞう）」、会社が繁盛して給料が倍増するといいなという、サラリーマンの鏡のような名前。

<8> 女性の名前は比較的まとも

まだ女性の活動家と出会うことは少なかった頃に出会った「立川亭夢子（たちかわていゆめこ）」は立川落語会という活動グループの一員で、夢子という名前が初対面の印象と合致していた。また、おとぎ話から抜け出てきた様な美しい名前の「すゞめ家うさぎ」は古典落語をきちんとこなす人だった。

<9> 家族で落語を楽しむ！！

広島から東京へ単身赴任中だった「黄金家鉄兵（こがねやてっぺい）」は夫婦で落語をやる。名前の経緯は聞き漏らしたが、奥さんの名は「プチ亭とまと」と言う。二人の名前のイメージが全く合わないところが面白いが、落語の方は二人ともとても面白い。この夫婦をモデルにして平安寿子（たいらあすこ）さんが小説を書いた。著書の名は「こっちへお入り」。

「寝床家道楽（ねどこやどうらく）」という粋な名前の人は、味のある語り口で観客を魅了する大ベテラン。

何と驚きは息子が「寝床家小道楽（ねどこやこどうらく）」、孫が「寝床家孫道楽（ねどこやまごどうらく）」。

親子三代の社会人落語一家。

<10> ナンセンスな名前も面白い

ちょっと矛盾するナンセンスな名前の「有借亭圓さん」は、アルカリ性と酸性をもじったのだろうと読み取れるが、「有っても借りるお金（円）」とも読み取れて面白い。

「頭下位性めまい」の持病がある方なのかなと思っていたが、どうやらそうではなく東海大学の落研出身だという「頭下位亭虎奴（とうかいていとらやっこ）」。

某出版社に勤め（もう定年退職なさったと思うが）、演芸研究者としても高い見識を持つこの方、高座に上がると「あっち亭こっち」という素っ頓狂な名前になる。

<11>おしまい

社会人落語をやるエンジニアの方に「改名したいけれど何か良い名前はありませんかね」と尋ねられた。職業を織り込んだ名前が面白いなと思って、「小鷲亭綾丸なんてきれいでいいんじゃないかね」と返したら不機嫌な反応が帰ってきた。

子ども落語教室を開いて参加者に自分の名前を考えてくるように言ったら、こんな名前が出てきた。子ども達の感性に脱帽した。

小凜萌子（こばなしもえこ）・幻魔王ラビエル（げんまおうらびえる）・スノー亭ふぶき

山髭亭智え蔵（やまひげていちえぞう）・虎家大河（とらやたいがー）・安亭槍三（やっていやるぞう）

以上